

「会員短信 30」

「笑って貰う難しさ」 竹下和宏

私は京都在住の八十五歳で、狂言を始めて三十五年になる。古典芸能の中では、能の「陰」に対して、狂言は「陽」であるが、舞台上で演ずるに当って師匠から特に教えられた事がある。

それは、「観客を笑わせようと思うな。素人が、どうだ巧いだろうと思って演技をすると臭くなってしまふ」ということだった。

一方、俳句の方は始めて二十年。滑稽俳句協会に惚れ込んで入会させて戴いて、まだ二年の新入りだが、滑稽な句づくりも狂言と同じようなことが言えるのではないか、と思っている。心身共に健やかな米寿を目指して、臭くなくて胆の底から大声で笑って戴けるような句づくりを学んで行きたいと願っている。

みな様、ご指導の程お願い申し上げます。

狂言 雑詠

春狂言摺り足軽ろき次郎冠者  
狂言の舞台に光る拭けぬ汗  
様ざまに芸を助ける扇子かな  
開演を待つ月光の能舞台  
能面のことりともせぬ良夜かな  
師は厳し師は有難し貴船菊  
豆撒に正装揃ふ能舞台  
挨拶を師よりも深く寒稽古  
福の神眩しく出づる初狂言  
初舞台堅き扇を開きけり  
狂言の言詞で述べる御慶かな